

武道における「礼」の概念と体育授業への展開

竹内友季子*

有山篤利** 藪根敏和***

抄録

本研究は、教科体育の武道授業において学習する伝統文化と結びついた日本独自の「礼法」の捉え方を示すことを目的とした。文献や先行研究から、「礼」、「礼法」について検討したうえで、質問紙調査により「礼法」の構成内容を検討した。

検討の結果、「礼」は、中国で発祥した「陰陽で調和をつくる概念」であることが明らかになった。日本においては、「礼」の概念を行動に生かし、「調和の『つくり方』」を意味する「礼法」を確立した。「礼法」は、武士の嗜みとしての行動の仕方を示す。しかし、武士が消滅し、武術の存在意義がなくなったため、武術は国民教育としての修養主義を強調した武道に変わった。それと同時に、「礼法」は武士の嗜みから躰教育へと変化した。したがって、「礼」は中国独自のものであり、「礼法」が日本独自の「調和の『つくり方』」であると言えるだろう。

また、質問紙調査の結果、「礼法」は、「意識の制御」、「臨機応変なふるまい」、「先を読む動き」の3つで構成されていることが明らかになった。よって、「礼法」は、『意識の制御』、『臨機応変なふるまい』、『先を読む動き』をもとにした調和の『つくり方』であると考えられる。以上の検討から、「武道の伝統文化＝修養主義」ではなく、中国独自の「礼」を発展させてつくられた武士の嗜みである行動の仕方として「礼法」を捉える必要がある。

本研究の結果は、武道授業において学習すべき本来の「礼法」について再検討するにあたっての一つの参考となるだろう。

キーワード：武道授業，伝統文化，礼，礼法，調和

* 兵庫教育大学大学院 〒673-1494 加東市下久米 942-1

** 兵庫教育大学大学院 〒673-1494 加東市下久米 942-1

*** 京都教育大学 〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1番地

The idea of “bowing” and its application in P.E. classes

Yukiko TAKEUCHI *

Atsutoshi ARIYAMA**

Toshikazu YABUNE ***

Abstract

This study aimed to describe and illustrate how the Japanese original ways of bowing are connected to traditional cultural practices that are taught in martial arts classes in schools. This study examined the literature and earlier studies about “bowing” and “ways of bowing,” and then the results of a “way of bowing” questionnaire.

The results of the examination showed the concept of “bowing” came from the idea of yin and yang which is a principle of Chinese philosophy to make harmony. In Japan, the concept of “bowing” was improved to encompass the “way of bowing,” which means the way of how to make harmony. At first the “way of bowing” was a necessary practice of a samurai. After the disappearance of the samurai system, martial arts skills changed by becoming a method of teaching discipline to citizens. Therefore, it can be said that “bowing” itself came from China but the “way of bowing” was established in Japan.

The result of the survey showed that the “way of bowing” contains three factors; the control of one’s mind, appropriate behavior, and predicting the distant future. So the “way of bowing” can be described as the way to make harmony based on the above-mentioned factors. As a result, the “way of bowing” should be understood as not a type of self-improvement practice or a traditional cultural practice of martial arts, but as a practical application for the samurai. The result of this study will give martial arts classes in schools a valuable reference about the primary idea of the “way of bowing” which students have to learn.

Key Words : martial arts class, traditional culture, bowing, the way of bowing, harmony

* Hyogo University of Teacher Education 942-1, Shimokume, Kato-Shi, Hyogo, 673-1419

** Hyogo University of Teacher Education 942-1, Shimokume, Kato-Shi, Hyogo, 673-1419

*** Kyoto University of Education 1, Fukakusahuzinomori-Cho, Hushimi-Ku, Kyoto, 612-8522

1. はじめに

日本において、武道は伝統文化を学ぶ教材とされている。武道については、武道憲章前文に「武道は、日本古来の尚武の精神に由来し、長い歴史と社会の変遷を経て、術から道に発展した伝統文化である。かつて武道は、心技一如の教えに則り、礼を修め、技を磨き、心胆を錬る修業道・鍛錬法として洗練され発展してきた。このような武道の特性は今日に継承され、旺盛な活力と清新な気風の源泉として日本人の人格形成に少なからざる役割を果たしている。」と説明されている。

これについて湯浅(2011)が、「実践」としての武術は、そこから抽出された「わざ」としての「芸」の修得・洗練、それ自体に価値を見出すようになり、武術の「武芸化」という文化的価値を創造し、「武道」が「わざ」や「芸」という文化的価値の追求を通して自己の心身のあり方を求めるという「自己修養」という教育システムをも包含するものへと変質したと述べているように、武道は精神の鍛錬を主とする修養主義を以てその存在意義を主張している。そして、修養主義的な伝統文化は「礼にはじまり礼におわる」に特徴づけられるように、「礼法」に象徴されている。

また、平成18年の教育基本法に「伝統と文化を尊重」というキーワードが導入されるとともに、学習指導要領も改訂され、各教科において伝統と文化を学習することとなった。そして、保健体育科では、武道領域がその役割を引き受け、学習指導要領においては、「礼に始まり礼に終わるなどの伝統的な行動の仕方を自らの意志で大切にしようとする(文部科学省, 2008)」と示され、態度の内容として、武道と同様に、修養主義的な伝統文化を学習する教材として、「礼法」が取り扱われている。

武道授業における「礼法」指導に関しては、武道等推進事業(スポーツ庁政策課学校体育室, 2016)が、「礼儀を重んじ相手を尊重する意義の徹底」を伝統文化を学ぶ「礼法」指導の具体的内容としてあげている報告をはじめとし、全国各地の「礼法」指導が多数報告され、それへの関心は依然として高いものであると言えるだろう。

しかし、教科体育として行う武道について、「運動には直接関係のない道徳的規範や礼法の習得に体育教材としての価値や意味を安易に求める陰で、『柔道で何を身に付けさせるのか』(有山, 2012)」、伝統文化として「礼法」を指導するならば、「礼」という行為に、相手への尊重や敬意などという万国共通の価値観以外に、日本人独特の気風(ethos)や社会的態度が反映されていることが示されねばな

ら(有山・山下, 2012)」ないという指摘がみられる。

このように、武道の修養主義が強調される中、教科体育における「礼法」の学習内容を検討する必要性があるという指摘から、武道授業における「礼法」に関して、

- ①武道における「礼法」と自国の伝統文化とのつながりが不明瞭であること
- ②武道における「礼法」の意味内容に独自性がみられないこと
- ③伝統的な行動の仕方としての「礼法」の内容が不明瞭であること

以上のような課題があげられ、それらを解明することで、より伝統文化とつながりのある「礼法」指導が実践できると考えられる。

2. 目的

本研究の目的は、前述した3つの課題を受け、

- ①武道の「礼法」が確立した歴史的経緯
- ②日本独自の考え方が含まれる武道固有の「礼法」の本来の意味
- ③伝統的な行動の仕方としての「礼法」を構成する内容の特定

を明らかにすることを通して、教科体育の武道授業において学習すべき伝統文化と結びついた日本固有の「礼法」の捉え方を提示することである。

3. 方法

- ### 3.1 ①武道の「礼法」が確立した歴史的経緯及び②日本独自の考え方が含まれる武道固有「礼法」の本来の意味の検討

文献及び先行研究から、中国における「礼」の起源、日本への「礼」の伝来、「礼法」の成立について検討し、上記の①、②を明らかにした。

- ### 3.2 ③伝統的な行動の仕方としての「礼法」を構成する内容の特定に関する検討

3.2.1 予備調査の実施

武家礼法を確立した「礼法」の代表格である小笠原流礼法に着目した。そこで、「礼法」の仮説的構成概念を検討するために、小笠原流礼法教場(京都梨の木神社)にて、予備調査として参与観察を行った。実際に稽古に参加し、稽古を通じて観察したこと及び体感したことを記録した。

また、よりの射た仮説的構成概念を設定するために、御宗家より小笠原流礼法や武道の礼法・歴史等を教わり、門人の方々に対して、①武道を行うう

えで、最も大切にしている考え方や行動の仕方、②学校体育で指導すべき礼法について聞き取り調査及び記述式質問紙調査を行った。

なお、参与観察実施の詳細は表1に、記述式質問紙調査の詳細は表2に示す通りである。

表1

期 日	時間	場所	稽古内容
平成28年6月25日(土)	13時~16時	梨の木神社	①礼法の基本的な動き ②お焼香の仕方他 ※御宗家より礼法について教わる
平成28年7月23日(土)	13時~17時	梨の木神社	①礼法の基本的な動き ②着物の着脱の仕方、畳紙の扱い方他 ※門人に聞き取り調査・記述式質問紙調査を行う
平成28年8月27日(土)	13時~18時	梨の木神社	①礼法の基本的な動き ②熨斗の折り方、水引の作り方他 ※門人に聞き取り調査・記述式質問紙調査を行う
平成28年9月19日(月)	9時~12時	梨の木神社	①礼法の基本的な動き ②午後の萩まつりの段取り、稽古
平成28年10月29日(土)	13時~20時	梨の木神社	①礼法の基本的な動き ②翌日の七五三の段取り、稽古

表2

期日	日時	場所	協力者
平成28年7月23日(土)	13時~16時	梨の木神社	小笠原流礼法門人の20~60代男女
平成28年8月27日(土)	13時~16時	梨の木神社	小笠原流礼法門人の30~60代男女

3. 2. 2 概念の操作化

参与観察及び記述式質問紙調査を参考に、仮説的構成概念を検討した結果、「臨機応変性」、「セルフコントロール」、「実用性・機能性」、「同調の意識」の4つの仮説的構成概念を設定した。

そして、本研究では、教科体育の武道授業における「礼法」の評価尺度を作成するため、高橋(2003)の「授業場面の観察カテゴリー」を用いた。学習場面を「マネジメント」、「学習指導」、「認知学習」、「運動学習」の4つの場面に区分し、区分した各学習場面と仮説的構成概念を照らし合わせながら尺度項目を作成し、著者が質問紙の原案を考案した。各学習場面の内容は、以下の表3に示した。

表3

学習場面	内 容
マネジメント	クラス全体が移動、待機、班分け、用具の準備、休憩、などの学習成果に直接つながらない活動に充てられている場面。
学習指導	教師がクラス全体の子どもに対して説明、演示、指示を与える場面。子どもの側からみれば、先生の話を聞いたり、観察したりする場面。しかし、教師の発問によって子どもの思考活動が中心になる場合はAIに記録する。
認知学習	子どもがグループで話し合ったり、学習カードに記入したりする場面。
運動学習	子どもが準備運動、練習、ゲームをおこなう場面。

3. 2. 3 調査用質問紙の作成

考案した質問紙原案をもとに、トライアングレーションによる検討を行い、調査用質問紙を作成した。質問項目は、4つの仮説的構成概念と、それらを測定するための具体的な行動からなる33項目

である(表4)。

表4

仮説的構成概念	学習場面				小 計
	マネジメント	学習指導	認知学習	運動学習	
臨機応変性	2項目	2項目	2項目	2項目	8項目
セルフコントロール	1項目	2項目	2項目	5項目	10項目
実用性・機能性	2項目	1項目	2項目	2項目	7項目
同調の意識	3項目	2項目	2項目	1項目	8項目
小 計	8項目	7項目	8項目	10項目	33項目

3. 2. 4 調査協力者

「礼法」の構成内容を特定するにあたって、より高水準の調査結果を得るため、「礼法」を習得しているであろうと推察できる小笠原流門人、柔道高段者、剣道高段者を調査対象とした。

285名中、239名の有効回答を得ることができた。有効回答者の全体の平均年齢は52.1歳、「礼法」または武道継続年数は39.0年、平均段位は5.9段であった(表5)。

表5

	有効回答数/全回答数	平均年齢	継続年数	平均段位
小笠原流礼法門人	28/28	52.8	39.0	
柔道高段者	138/152	52.4	39.1	5.5
剣道高段者	73/104	51.2	38.8	6.2
合計	239/285	52.1	39.0	5.9

3. 2. 5 調査時期と調査方法

調査時期は、平成28年9月~同年10月である。

調査方法は、小笠原流礼法門人については、稽古が行われている教場にて集団面接法により回答を得た。また、一部の門人に関しては、門人の代表者と著者が連絡を取り合い、郵送にて調査用紙を配布し、代表者が協力者に個別に調査用紙を配布した。協力者が個別に回答した後、調査用紙は代表者がとりまとめ、著者に返送された。

柔道高段者の回答については、H県柔道連盟の協力を得て、柔道指導者講習会にて集団面接法により得られたものと、公的機関、大学教員、高校教員の代表者を通じて郵送(一部手渡し)にて調査用紙を配布し、集団面接法または個別にて回答を得られたものがある。

剣道高段者の回答については、H県剣道連盟の協力を得て、稽古会にて集団面接法で回答を得たものと、町道場にて集団面接法で回答を得たもの、公的機関の代表者への手渡しによって調査用紙を配布し、集団面接法にて回答を得たものがある。

3. 2. 6 統計処理

得点の統計処理に関しては、SPSS Statistics ver.19を使用し、以下の手順で行った。

項目内容に最もあてはまると思う回答4点、あて

はまらない回答を1点として、4段階で換算した。各項目の標準偏差を求め、全項目の回答に偏向傾向がないことを確認したうえで、3～6の範囲で因子数を指定して探索的因子分析（主因子法・Promax回転）を繰り返した。因子負荷量.40以上を基準に解釈可能性を検討することによって尺度における因子の抽出を行った。

内的一貫性の検証は、Cronbachの α 係数を算出することにより行った。

4. 結果及び考察

4. 1 武道の「礼法」が確立した歴史的経緯

4. 1. 1 中国における「礼」

「礼」は、中国において、陰陽五行から生まれた、生活リズムや農耕生産の氣息など、自然と人間とを調和させるための「天の法則に従うための概念」であった。その後、人間社会が発展するとともに、異なる民族が一つの国に共存し、国としての調和を保つための「国家秩序を維持するために人々が守る概念」となった。

そして、「礼」の概念は、天や人間、文化形成や武術の技術理論など、全ての関係において「調和づくり」を目指したものであったため、中国における「礼」は、「陰陽で調和をつくる概念」と考えられる。

4. 1. 2 「礼」の日本伝来と武家礼法の確立

「礼」が『論語』とともに日本に伝来すると、皇室祭祀に用いられ、次に、貴族の教養としての有職故実とされるとともに、朝廷礼式に用いられたとされている。その後、武家中心の社会となり、その特権意識を主張するために、今からさかのぼること約200年前、武家礼法が確立された。

武家礼法の代表格は、弓術や馬術と結びついた、鎌倉時代から江戸時代までの武家社会の公式礼法であった小笠原流である。『修身論』と『体用論』を説いた小笠原流では、「実用・省略・美」を重視しており、無理・無駄のない実用的な動き方や身体の使い方を示すものが武家礼法であり、それは武士としての嗜みであると考えられている。

4. 1. 3 「礼法」の学校教育への導入

武士の消滅とともに、武術の存在意義がなくなったことから、武術は、国のために力を尽くす国民を育てる国民教育として、また、国際社会に対応していくための日本のアイデンティティとして、修養主義を強調した武道に切り替わり、現在に至る。

また、それと同時に、「礼法」は、「武家礼法」か

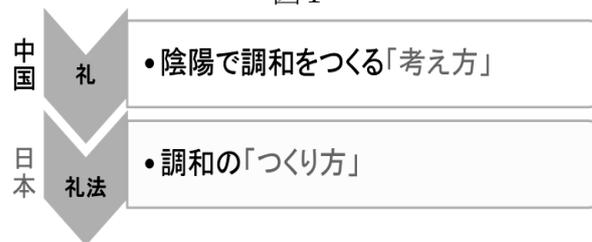
ら「武道の礼法」へと変化し、その役割は、「武士の嗜み」から「躰教育」へと変化したのである。

4. 2 日本独自の「礼法」

中国においては、「礼」は、あくまでも「概念」として捉えられていたが、日本では、外来の優れたものを日本の伝統といえるように変容（中村ら、1998）させ、「礼」をより実用的なものとなるようにアレンジし、様々な行動を定めるもととしたのである。その行動は、武士のふるまいに特徴づけられるように、「動き方」、「使い方」という、「礼法」に則ったものであった。「礼法」は、言うまでもなく、「礼」の概念をもとにしており、「動きという調和をつくるための行動の仕方」つまり、「調和の『つくり方』」であると考えられる。

したがって、「礼」の概念は、中国独自のものであり、それをもとにつくられた「礼法」が、日本独自の伝統文化であると考えられる（図1）。

図1



4. 3 「礼法」の構成内容

4. 3. 1 「礼法」の因子構造と因子の命名

探索的因子分析（主因子法・Promax回転）を繰り返した結果、3因子22項目が採用された。

第1因子については、対面した相手や場に対する自身の行動など、行動の際には、常に自分自身をコントロールするという「セルフコントロール」が必要であり、その意識に関するものであると解釈したため、「意識の制御」と命名した。

第2因子については、相手やその場の雰囲気を読んで、その場その場に適切な行動がとれるように、臨機応変に行動を判断し、選択するという共通性があると解釈したため、「臨機応変なふるまい」と命名した。

第3因子については、出来事に対する手立てを読み、どのような行動をとるのかということに関連するものであると解釈したため、「先を読む動き」と命名した。

よって、「礼法」は、「意識の制御」、「臨機応変なふるまい」、「先を読む動き」で構成されていることが明らかになった。因子に従属した単純構造は、次頁表6に示した。

表6

因子名	番号	設 問	因子負荷量	M	S D	Cronbachの α 係数
制御の意識	31	おじぎする時は、相手のタイミングや呼吸に合わせようとしている。	0.79	3.67	0.54	0.85
	16	おじぎをする時は、形式や正しい動作をしっかりと守ろうとしている。	0.71	3.88	0.34	
	32	みんなと一緒に立ったり座ったりする時は、周囲の人の動作のタイミングや呼吸に合わせるようにしている。	0.69	3.60	0.56	
	33	肩に力を入れず、自然体ですっと立つようにしている。	0.68	3.59	0.59	
	21	先生が説明・演示・指示の時には、常に姿勢を正しくするように気をつけている。	0.62	3.66	0.56	
	18	動きやすいように、いつも稽古着や防具を正しく着用するようにしている。	0.59	3.89	0.33	
	17	整列をする時は、常に上座・下座を意識するようにしている。	0.55	3.81	0.46	
	19	整列する時は、まっすぐ並べるように、いつも周囲の立つ位置に気を配るようにしている。	0.55	3.83	0.42	
	29	負けた時は、悔しくても騒いだり、落ち込んだりしないようにしている。	0.53	3.31	0.74	
臨機応変なふるまい	11	学習が効率よく進むように、学習カードや資料をまとめたり整理したりするようにしている。	0.82	2.58	0.87	0.72
	12	話し合いや学習カードに記入する時は、他のグループや仲間のペースに合わせようとしている。	0.75	2.71	0.85	
	5	先生が説明・演示をする時には、大切なことや要点を聞き逃さないように、メモしたり、写真や動画を撮ったりしている。	0.61	2.68	0.91	
	25	仲間と活動する時には、効率よく学習が進むように、立つ位置や座る場所を工夫するようにしている。	0.57	3.38	0.72	
	24	仲間同士の活動では、仲間の影響を考慮して発言したり行動したりするように気をつけている。	0.56	3.46	0.62	
	10	仲間同士の活動では、活動や話し合いが盛り上がりすぎたり、夢中になりすぎたりしないように、冷静さを失わないようにしている。	0.53	3.18	0.75	
	23	仲間同士の活動では、状況や雰囲気に応じた役割を見つけようとしている。	0.47	3.36	0.65	
	26	仲間が話すときには、相づちを打とうとしている。	0.44	3.13	0.76	
先を読む動き	7	先生が演示する時には、見聞きしやすい場所に移動したり、姿勢を工夫したりしている。	0.76	3.78	0.46	0.78
	8	先生の指示・発問に対して、自然に反応したり返事したりしている。	0.70	3.53	0.63	
	6	先生が説明・演示・指示の時には、私語したり、よそ見をしたりしないようにしている。	0.69	3.85	0.38	
	1	準備・片づけをする時は、状況をよく見て、手薄なところや困っている仲間を手伝うようにしている。	0.45	3.59	0.56	
	9	仲間の元気がない時には、励ましたりフォローしたりしている。	0.43	3.37	0.66	

4. 3. 2 内的一貫性の検証

Cronbach の α 係数を算出した結果、「意識の制御」因子、「臨機応変なふるまい」因子、「先を読む動き」因子の3因子全体において.72, 「意識の制御」因子において.85, 「臨機応変なふるまい」因子において.84, 「先を読む動き」因子において.78 の値を得た。

3因子いずれも.70以上の値を得ているため、内的一貫性は確保されているものと考えられる。

5. まとめ

本研究は、武道の「礼法」が確立した歴史的経緯、日本独自の考え方が含まれる武道固有の「礼法」の本来の意味、伝統的な行動の仕方としての「礼法」を構成する内容を明らかにすることを通して、教科体育の武道授業において学習すべき伝統文化と結びついた日本固有の「礼法」の捉え方を提示することを目的とし、検討を行った。

検討の結果、以下に示すことが明らかになった。

- ① 武道の伝統文化は「礼法」であり、修養主義ではないこと
- ② 日本独自の考え方が含まれる武道固有の「礼法」は、「調和の『つくり方』」であること
- ③ 「礼法」は、「意識の制御」、「臨機応変なふるまい」、「先を読む動き」で構成されていること

これらのことから、武道の伝統文化は「礼法」であると証明された。自国の伝統文化として「礼法」を学ぶために、まず、「武道＝修養主義」という考え方を見直す必要があるだろう。そして、「礼」と「礼法」は別のものであり、中国の「礼」を発展させ、日本独自にアレンジしたものが「礼法」であることを認識しなければならない。さらに、「礼法」を道徳ではなく、武士の嗜みである行動の仕方として捉える必要がある。

それらを踏まえた上で、「礼法」の「意識の制御」、「臨機応変なふるまい」、「先を読む動き」の要素を授業に取り入れ、実践することが、伝統文化としての日本独自の、武道固有の「礼法」を学ぶことであると考える。

本研究の結果は、武道授業において学習すべき本来の「礼法」について再検討するにあたっての一つの参考となるだろう。

参考文献

日本武道協議会：武道憲章，武道の理念

<http://www.nipponbudokan.or.jp/shinkoujigyou/kenshou>（閲覧日：平成28年12月25日）

湯浅 晃（2011）『武道伝書を読む』（株）ベースボール・マガジン社，p.43

教育基本法，教育の目標第二条，五

文部科学省（2008）「中学校学習指導要領解説保健体育編」株式会社東山書房，pp.105, p.114

スポーツ庁政策課学校体育室（2016）

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/jyujitsu/1368010.htm（閲覧日：平成28年12月19日）

由山篤利（2012）「武道必修化と柔道授業の安全をどう考えるか」体育科教育 60(7):74-75, p.74-75

由山篤利・山下秋二（2012）「教科体育における柔道の学習内容とその学びの構造に関する検討」体育科教育学研究 31(1):1-16, p.4

高橋健夫（2003）『体育授業を観察評価する—授業改善のためのオーセンティック・アセスメント』昭和出版，p.36-39

中村敏雄・渡辺融・本田郁子・時津賢児・志々田文明・坂上康博・高津勝（1998）『スポーツ文化論シリーズ⑨ 日本文化の独自性』創文企画，p.143

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

